

I. はじめに

東広島市は近年急速な人口増加を経験している都市である。その契機となったのは、広島大学の統合移転に伴って始動した2大プロジェクト、「賀茂学園都市建設」と「広島中央テクノポリス建設」であろう。これによって東広島市の社会基盤や産業基盤が整えられてきた。しかしその発展は同時に人々に、いかにしてこの地域に独特の景観を保全し、また新しく形成していくのかという問いを投げかけることになったのではないかと推察する。もともとこの西条盆地には、豊かな自然の緑のなかに赤瓦（石州瓦）と白壁を持つ民家が点在するという、独特な文化景観を持っていたといえる。しかしながら、現在では大学や工場の進出に伴って、新たな住民や学生たちが入ってきたことによって新興住宅地やワンルーム・マンションが増え、さらに旧市街地においても高層化が進んで新たな市街化の進行によってその独特の景観は大きく変化している。また、交通の整備が進められていることによって、東広島市は広島市の通勤圏内に位置する衛星都市としての役割を担うようにもなった。それによって、駅の近辺に商業ビルや高層ホテルのほか、既存市街地においても住宅地の更新が進んだことによって、近代的な都市景観に変化しつつある。

このような変化は、景観の観点からみるとどのように捉えられているか。東広島市の景観について岡橋（2010）はアンケート調査にもとづいた市民の景観意識と景観づくりの課題に関する調査を行っている。このアンケート調査によると、東広島市民の身の回りの景観への関心は高く、「赤瓦屋根の農村風景」も「好きな景観」として、また「大切にしておいて後世に残したい景観」としてあげられている。しかし、市民の景観づくりへの意向として「市民への意識の啓発」や「条例や協定をなどで規制を厳しくする」ことを支持しながらも、「自分の家を色や形などで周辺の景観に合うようにする」の支持率は17.7%と低く公共性への意識の低さが指摘されている。同様に、三浦ら（2000）は市民へのアンケートから、市民が伝統的な形式よりも現代的な形式の家の建築を好みながら、伝統的景観と現代的な建築の調和させる必要性を感じているということを示している。また三浦らは、若年ほど新しい建築様式を好むという結果も出しており、景観に関する意識は住民のなかでも年齢により異なっていることがうかがえる。

このような景観への意識のズレは、市民が形成する景観のなかに実際にどのように表れているのか。前述した先行研究をもとに、本稿では東広島市内の住宅景観に着目し、その実態を解明し、今後の景観行政の資料を提示することを目的とする。

Ⅱ．研究対象地域

1．東広島市の概観

東広島市は広島県のほぼ中央部に位置する中核都市で、面積は 635.32km^2 で人口 190,135（平成 22 年現在¹⁾）、人口密度は $300.20 \text{人}/\text{km}^2$ である。1974（昭和 49）年に西条町、八本松町、志和町、高屋町の 4 町が合併して誕生した市であり、その後 2005（平成 17）年に黒瀬町、福富町、豊栄町、河内町、安芸津町と合併して現在の東広島市となっている（図 1 参照）。そのため、西条、八本松、高屋、志和、黒瀬、福富、豊栄、河内、安芸津の 9 つの地区に区分されている。それぞれの地区の人口は表 2 のとおりである。なかでも西条地区は東広島市の中心地区であり、市の人口の 4 割近くが居住している。一方、福富地区、豊栄地区の人口は少なく、特徴として農業従事者の割合が高い地域といえる（表 3 参照）。

2．市の人口の変化

東広島市は県内の他市に比べ人口増加率が高い（表 4 参照）。東広島市の人口動態の推移は図 5 に示すとおりである。人口は増加し続けているが、1996（平成 8）年以降、人口増加の伸びは小さくなっていることがわかる。人口の増減の要因は、一般的に自然増加と社会増加の 2 つに大きく分けることができる。図 4 から、東広島市の人口増減は、社会増減によるところが大きいといえる。以下、東広島市内の各地区の人口増減を、自然増減と社会増減に分けて考察したい（表 6、7 参照）²⁾。もちろん各地区の人口に差があるため、表中の数値の大小はそこに起因するということを考慮しなければならないが、自然増減と社会増減を分けることで、地域によって人口増減の要因が違うということがわかる（参考として、平成 23 年の各地区の出生数、死亡数、転入数、転出数を表 8 に示している）。

自然増減については、全体の傾向として増加率の遞減がみられるものの、増加を続けている。しかし、これを地域別にみる地域間でかなりの差がみられる。2004（平成 16）年から 2011（平成 23）年の間に、常に自然増加している地区は西条地区と八本松地区であり、増加数では西条地区が圧倒している。一方で、高屋地区を除く他の地区は常に自然減少していることがわかる。福富地区、豊栄地区、河内地区は過疎地域として県に指定されている地区であるということもここで触れておきたい。

次に社会増減についてみる。ここでも西条地区の増加率の数値の高さが目立つが、高屋地区での社会減少が大きいことに注目したい。高屋地区での社会減少の一因として、規模の大きい団地（東広島ニュータウン）に居住していた子ども世代が大学入学年齢に達したことにより進学を理由とした転出の増加が考えられる。一方で、福富地区、豊栄地区、河内地区は社会減少より自然減少のほうが多く、人の動きが少ないといえる。

¹⁾ 国勢調査による。

²⁾ 「転居」（市内での移動）は含めない。

以上のことから、東広島市には人口が増加している地区と減少している地区の双方が存在し、それでもなお市の人口が増加しているのは市内の一部の地域、とくに西条地区や八本松地区における人口増加数が大きいということができる。このことは、東広島市の住宅供給とも関係している。

3. 市の住宅開発状況

ここで、東広島市の開発に関する資料である開発登録簿を用いて考察していきたい。開発登録簿とは、開発を行う際に市に提出し許可を受けたものの記録である。本稿では、東広島市における住宅開発のうち規模の大きいもの、いわゆる団地またはニュータウンと呼ばれるものをここで取り上げる³。取り上げる基準として、0.7ha 以上のもので、なおかつ戸数が 25 戸以上のものを対象とした⁴。表 9 は今回対象として抽出した団地を、開発登録の年代と開発面積、そして地域別にまとめたものである。年代の区分は 10 年ごとに区切っている。なお、使用したのは開発登録簿に記載されている開発許可年月日であるため、住宅の建設時期に関しては開発登録年月日以降ということになる。

まず、東広島市の専用住宅の建築戸数の変化をみる。図 10 は、戦後から 1993 (平成 5) 年までの東広島市の専用住宅の戸数を示したものである。建築戸数は 1980 年代が最も多くこれは表 9 中で 1975 年から 1990 年にかけて住宅の開発登録件数が多いことと合致する。

開発件数は西条地区、八本松地区、高屋地区に集中している。開発の規模としては年代が上がるにつれて 4 ha 以上の大規模なものから 1 ha 未満のもの、いわゆるミニ開発と呼ばれるものへと移行している。図 11 に西条地区、八本松地区、高屋地区における開発件数の推移を示している。ここから、それぞれの年代に一定数の開発が行われてきたこと、また開発数の増減が各地区によって異なる時期に起きていることが読み取れる。

III. 調査・分析の手法

1. 調査方法

本調査では、抽出した団地からさらに 8 つの団地を取り上げた (文末資料に該当する団地の Google Earth の写真画像を掲載している)。これらの団地は、①住宅の変化をみるために開発登録された年代で分け、②各年代のなかで規模による違いがないかをみるため、最も戸数の小さいものと大きいものの 2 つを選出する、という方法により決定した⁵。開発登録簿に記載されている戸数を参考にしたが、現在分譲中であつたり、空き地となっている区画があるために、実際の戸数が若干少なくなってしまった団地もある。また、開発登

³ 団地とニュータウンは厳密には定義が異なるため、本稿では団地という呼称を使用する。

⁴ 開発登録簿に記載されている戸数などの数値は、現在建っているものとは異なる場合がある。それは登録後に区画変更が行われたためと考えられる。

⁵ すでに由井 (2003) によって調査済みであることや開発規模を考慮し、東広島ニュータウンは対象から除いた。

録簿に記載されている敷地外であるが、団地に隣接しているために住宅団地との連続的景観を形成していると判断できる住宅については団地の戸数として数えている。手順としては、まず対象地域で住宅を撮影し、次に持ち帰った画像をもとにして調査項目ごとにデータを入力、そして入力したデータを集計し分析を行った。

2. 分析方法

本研究では、建築様式や色彩による住宅景観を明らかにすることが目的であるため、色彩についての項目を多く設けている。また、画像を用いての分析であるため、撮影時の天気や時間帯、分析時に使用するディスプレイによって、実際の色とは多少の誤差が出ることとを先に断っておかなければならない。各団地の団地情報および撮影の記録は表 12 のとおりである（前章で区分した開発の時期については、以降 1975～1980 年をⅠ期、1981～1990 年をⅡ期、1991～2000 年をⅢ期、2001～2010 年をⅣ期、2011 年以降をⅤ期とする）。

3. 分析項目

住宅団地の現地で撮影した写真画像および Google Earth の写真画像を組み合わせる用いて分析を行う。これまでの景観分析において、色彩の分析はいくつかみられたが、東広島市の景観は、赤瓦の和風住宅が卓越した独特な地域性をもったものであり、色彩に焦点を当てた分析は景観の地域的な特徴を把握するには有効な手法と考えた。なお色彩に関する分析の際にはマンセル表色系を指標としている。マンセル表色系とは JIS に採用されるなど、広く一般的に使用されているカラーオーダーシステムである。色合いである「色相」を、赤 (R)、黄 (Y)、緑 (G)、青 (B)、紫 (P) に分け、さらにその中間色である黄赤 (YR)、黄緑 (GY)、青緑 (BG)、青紫 (PB)、赤紫 (RP) を足した 10 色相で表現する。これに、明るさの度合いである「明度」と鮮やかさの度合いである「彩度⁶」によって色の表示を行う。

上に挙げたマンセル表色系の色相分類をもとに、分析の項目として大きく分けて「建築様式」、「屋根の形状と色彩」、「壁の色」、「塀の構成」を設けている。これらの項目について各々の住宅を分類し、各団地の傾向を読み取る。

IV. 分析結果

各団地の分析結果をもとに、以下のそれぞれの観点での考察を行いたい。分析の結果をグラフにしたものと建築様式の写真画像は、対象地域・団地の Google Earth の写真画像

⁶ 彩度は本来「低彩度」、「中彩度」、「高彩度」と分けられるが、住宅においては「低彩度」の色彩を用いることがほとんどであるため、「中彩度」でも目立つ場合が多い。そのため本調査の分類では「中彩度」も「高彩度」として扱っている。

とともに文末資料としてまとめて掲載した。

1. 建築様式

基本的な建築様式の分類は、和瓦や引き戸など比較的に伝統的な造りを持つものを「伝統和風」、和瓦を用いるなど和風に見えるがレンガなどの洋風な要素をもったものを「折衷和風」、妻の面が正面にくるような屋根や、出窓・バルコニーなどの造りを持ち、また有彩色の色使いなどで洋風な要素の強い「洋風」、基本的に無彩色で、窓の装飾がなかったりブロックを重ねたようなシンプルな形状をした「モダン」という項目で分類した。しかし、住宅団地によってこれらでは分類ができない住宅がある場合、適宜新たな項目を加えている（それぞれの建築様式の例として、文末資料に写真画像を掲載したので参照）。

まず、建築様式の割合の変化についてみると（文末資料「1. 建築様式」の円グラフ参照）、開発年代が新しい住宅団地ほど和風の住宅が減少する一方、「洋風」と「モダン」が増加している。既存の集落における住宅とは異なり、住宅団地では和風住宅が少ないが、開発時期別に分析すると、ますます伝統的な和風住宅の建築数は減少し、日本的な景観が大きく変化していることが明らかとなった。

また、住宅団地のなかでも、建売住宅と注文住宅の割合によっても建築様式に大きな差があることが明らかとなった。団地番号8において「洋風」、「モダン」のみの割合になっている要因としては、住宅を建築した業者によってある程度決まったタイプの住宅が供給されているためである。

2. 屋根の形状と色彩

まず、屋根の形状の分類方法については「切り妻」、「寄棟」、「入母屋」、「方形」、「招き屋根」、「平屋根」と分けている（これらの写真画像も文末資料に掲載している）。住宅のなかには、切り妻と寄棟などの2種類以上の形状を組み合わせているものが多いが、今回は重なっている屋根のうち上部の形状、もしくは住宅の正面から認識できる形状を分類の目安とした。色相の項目は大きく「R」、「YR」、「Y」、「B」、「G」に無彩色である「灰」、「黒」、「白」を加えて分類している。一般的には、屋根の色には低明度で低彩度の色を使用する。

屋根の形状は団地によって異なる傾向をみせている（文末資料「2. 屋根の色彩と形状」の円グラフ参照）。団地番号3、5、7に関しては切り妻が占める割合が大きい。しかし割合としてはあまり目立たないが、開発年代が新しくなるほど入母屋の屋根が減少し、方形屋根や招き屋根が現れてきている。これは、住宅の様式や形状が簡素化されているということにも受け取れる。西条盆地における伝統的和風住宅では、屋根に工夫をしたり、複層的な屋根による趣向を凝らした「粋な」形状もみられたが、住宅団地ではそれらの屋根が少なく、西条盆地の地域の特徴が次第に消えていることが明らかとなった。

また、屋根の色彩については（文末資料「2. 屋根の色彩と形状」の円グラフ参照）、

詳細な結果を表 13 として示している⁷。この表は、各団地の屋根の色相、さらに色相ごとの彩度と明度についてのものである。明度とは先に説明しているように明るさの度合いのことで、高くなればなるほど白に近づき、逆に低くなればそのぶん黒に近づく。また、彩度は高くなるほど鮮やかな色（ビビットカラー）となり、低くなると色みを失い濁った色（グレイッシュカラー）になる。住宅などの建築物は屋根であれば低明度で低彩度の色を、壁であれば高明度で低彩度の色を用いるのが一般的である。そのためこの表 13 では、あえて「高彩度」、「高明度」のものを抽出して表示した。

表 13 から、まず開発時期に関係なく団地全体で屋根の色は「灰」と「黒」の割合が高いということがわかる。そして次に割合が高いのが「R」と「YR」となった。この「R」、「YR」に関しては高彩度のものもあり、軒数としては戸数の多い団地に多いが、その割合は戸数の少ない団地で目立つ。「R」と「YR」には赤瓦も含まれている。しかし、傾向としてⅠ期からⅣ期にかけて「R」、「YR」の屋根材は赤瓦から洋瓦へと移っている。同様に、「灰」、「黒」の屋根材も瓦から瓦以外のものへと変化している。高明度となった屋根では、多くが「灰」である⁸。「灰」以外の色相では、Ⅰ～Ⅱ期では「B」の割合が高い。一方で、Ⅱ～Ⅳ期で「B」がみられないのは、瓦の使用の減少と照らし合わせると「B」が青い瓦であるためと考えられる。また、団地によっては高彩度で高明度の「G」の件数が多いところもあるが、これは戸数の大きい団地に限られる。全体的にみると高彩度・高明度の屋根は戸数の大きな団地の方によくみられる。屋根の色彩は屋根材に関係しており、建築様式ともかかわりがある。そのため、特に建築様式が多様になっている団地番号 4、6 は多様で「目立つ」色彩の屋根を持つ住宅が多いという結果が出た。またデータを取っていないために個人的な感想になるが、調査で団地内をまわっていた際に、建設時期が新しくなるにつれ屋根の色の識別が困難になっていった。それは建築様式を問わず下屋底のある住宅が少なくなっていくことが原因であったようである。これは建築様式が徐々にシンプルでモダンになっていることにも深く関係しているが、住宅景観の変化の一端であることは間違いない。

3. 壁の色

壁の色の分類も、他の色彩の分類と同様にマンセル表色系を指標にして行った。色相の項目は大きく「R」、「YR」、「Y」、「B」、「G」、「灰」、「黒」、「白」に分類している。壁の色が1色だけの場合は「単色」、2色をこえる場合は全面の色または面積の大きい色を壁の色を壁の色とした。この結果は文末の表 14 に示した。またさらに詳しくみていくために、1色以上使用している壁で、色によって使用している素材が同じか異なるか、そしてその

⁷ 「灰」、「黒」、「白」は無彩色であり彩度がなく、また「黒」に関してはこの色自体が最低明度となるため高明度にはなりえない。よって表中の該当欄は $\times$ としている。

⁸ 「灰」の明度の基準としては、「黒」と「白」の間中であるところ（明度のスケールでは 5.5 と示される）を境に、目視によって「暗い灰」と「明るい灰」に分類している。

色同士がコントラストを持つ場合は「強」という分類をした。これは表 15 に示している。表中の「強調色あり」という項目は、ドアや外壁の一部でアクセントとなる色彩を使用している住宅を抽出したものである。

まずは使用されている壁の色の割合を団地ごとに図に表した（文末資料「3. 壁色」の円グラフ参照）。これを団地の戸数の大小で分けて変化を見てみると、「白」の割合の変化が両者で異なることがわかってくる。全体の傾向としては「YR」の割合が多くなってきているのだが、戸数の少ない団地では「白」の割合は変わらない一方で、戸数の多い団地では下がっている。これは、団地がつくられる場所に関係しているのではないと思われる。小さな団地は、既存の住宅地のそばに多くつくられている。そのため、周りの住宅の色彩に合わせる必要がある。しかし、規模が大きくなると新たな土地を切り開いて作られるために、周囲に合わせる必要がないのである。これは壁だけではなく、屋根の形状などでも同様にいえることである。さらに、詳細な色彩構成を表 14、15 とともに見ていきたい。

表 14 では、前節の屋根の色と同様に各団地の壁の色相とその色相ごとの彩度と明度について、ここでは「高彩度」、「低明度」のものを抽出している。表 14 から、高彩度の壁の割合として大きいのは「R」、「YR」、「Y」であることがわかる。これは時期に関わらず全体に言えることである。しかし、戸数では大きな団地の方が多いのだが、小さい団地の方が割合としては高い。高彩度の壁は、可視部分の面積が大きいため、高彩度の屋根よりもかなり目立ってしまう。壁の色やその彩度は、景観形成の要素として主要な役割を担っている。一方壁の明度も、彩度ほどではないが同様のことがいえる。低明度の壁の割合は団地全体では「灰」、「黒」、それに加えて大きな団地においては「R」、「YR」が高いことがわかる。Ⅲ期以降、特に団地番号 6、7、8 では「灰」と「黒」での割合が高いのは、これらの団地での建築様式の割合にも関わると考えられる。表 16 は団地番号 6 の「モダン」、「モダン（特異型）」と壁の色をクロスさせたものだが、「黒」の壁は「モダン」系の建築様式で占められている。つまり、「モダン」系の建築様式が増えることにもなって低明度、特に黒い壁が増加しているということができよう。団地番号 2 について、「黒」の壁は 2 軒とも「モダン」の住宅であった。雰囲気からみて、建築後間もないようであった。この団地のように、今後改修工事や建て替えによって、さらに団地の景観が変化することが予想できる。また調査時、団地番号 6 では、建売が行われている「モダン」な住宅が数軒並んでいた。まだ空き地となっており住宅が建っていない区画も多かった。この団地に現在建っている住宅は、通りごとに（使用されている色彩はそれぞれ違うが）建築様式や塀が統一されているものが多いため、計画的に分譲されているもののようだが、建築の時期によって多様な建築様式の住宅が建てられていくことが予想される。これはひとつの団地内に多様な住宅景観が生まれることを意味している。

次に、表 15 を見ていく。これは住宅の壁の色彩構成について、「単色」、「レンガ調」、「2

色」、「3色」と分け、さらに2色の場合は「同素材」と「異素材」⁹、そして色の間にコントラストがあれば「強」というふうに分類した。3色の場合は対象となる住宅が少なく、ほとんどの場合は異素材どうしであるため、素材の分類は行わなかった。また、それぞれにレンガが用いられている場合は、それも数えた。なぜレンガのみこのように別に数えたのかというと、レンガは他の素材よりも容易に「洋風」をイメージしやすく、建築主が創出しようとしている景観の方向性を示していると読むことができると考えるからである。レンガは多くのものが比較的高彩度の「R」、「YR」であり壁に使われている色彩とコントラストを生むことが多い。

表15からは、全体の傾向として「単色」、つまり1色のみの構成が多いということがわかる。また、「単色」では「強調色」がある軒数も最も多い。「強調色」は組み合わせによって住宅の雰囲気を引き締めたり、安定感を出したりと様々な工夫が可能である。「強調色」はほかにも「同素材」、「異素材」の2色構成のなかで色と色を分けてまとまりよく見せるためにも使用されている。「同素材」と「異素材」についてであるが、小さな団地は「同素材」の割合が非常に低く、大きな団地は「同素材」の割合が高いところもあるが、「異素材」の割合が高い傾向がみられる。「3色」については、団地番号4、6のみにみられた。あまり色彩を多用するとまとまりがなくなってしまうため、それほど多くないのだろうと考えられる。団地番号4、6は壁の色や色彩構成において、多様な住宅が団地内に存在していることがわかる。戸数もかなり多い団地であるため、その分住民の好みが多様であることを表しているのかもしれない。

4. 塀の構成

塀は住宅の周りを囲うことで、公と私を分ける境界になると同時に、景観に変化を加える役割も持っている。例えば、同じ色形の住宅であっても、その塀を植物にするのかコンクリートにするのかでまったく違った印象を与える。これは「通り」という観点からでも同様のことが言える。コンクリートブロックの塀は、地震による倒壊の危険性もあり、災害対策からも問題になるが、近年の住宅団地ではコンクリートブロックによる塀が減少し、植木が増加している。

本調査では、住宅の四辺の少なくとも一辺を覆う程度の、連結性を持っている集合体を塀と定義した。塀の構成要素は「金属」、「石垣」、「木調柵」、「ブロック」、「レンガ」、「瓦」、「コンクリート」、「生垣」の8つである。各々の要素について少し説明をしたい。まず「金属」には白や黒のものが多く、建築様式を問わずに使用されていた。同様に「ブロック」も多く、の場面で使用されているが、この色相は灰色を基調に色味のあるものも多かった。「木調柵」とは木製もしくは木製に似せた柵のことを指し、洋的なものが多く、色彩は白

⁹ 素材の違いについては、光が当たった時の反射の仕方や影のでき方が異なることによって住宅の雰囲気が変わるために設けた項目である。そのため、同素材のものも表面の凹凸などに違いがあれば「異素材」と分類した。

や明るい茶色のものが目立つ。一方で、「石垣」と「瓦」は和風建築の住宅のみにみられ、Ⅰ期からⅣ期にかけて減少しその姿はほぼ消えてしまった。「コンクリート」は様々な建築様式で使用されており、「モダン」系の建築様式の住宅でよく使用されていた。「レンガ」と「生垣」は高彩度のものもあり、その場合は通りの景観のアクセントになる。団地によってはこのアクセントを取り入れているところもある。これを開発時期でみると、「レンガ」から「赤や黄の植物」へと変わっている。そして塀の構成は、いくつかの要素から成るかで分類し変化をみた（文末資料「4. 塀の構成」の円グラフ参照）。各団地のグラフを見ると、戸数の少ない団地と戸数の多い団地は、ほぼ同じような傾向を示していることに気が付く。どちらも高い割合を占めるものが3種類から2種類へと変わり、それとともに「塀ではない¹⁰」ものの割合が増えている。

また、塀を構成する要素の数を図にしてみると、団地が新しくなるにつれて使用される要素が減り、全体のバランスが変わっていることがわかる。特に団地番号6、8においては通りごとに塀のデザインが決められているらしく、使用される要素も限られてきている。

以上のことから、住宅の建築様式や色彩に関して、Ⅰ期からⅣ期にかけて徐々に団地ごとのまとまり感、もしくは通りごとのまとまり感が生まれてきていることがわかる。また、開発時期による年代の変化とともに、団地の戸数の大小によって示す傾向がことなることが分かった。これは団地の立地や建築業者などによるところもあるだろう。住宅景観という面から考えると、日本的な住宅は激減し、モダンな新タイプの住宅が増加しているということがあるが、住宅に使用する色彩や要素が徐々に絞られていき、それによってまとまりのある良好な景観が創出されてきているということができよう。

V. おわりに

本稿のまとめとして、はじめに述べた東広島市の文化景観と新たな住宅景観との関係を考えてい。赤瓦と白壁の民家の景観としては、まず特徴的なこととして赤瓦の色彩（R～YRの色相）と、はっきりとコントラストのある色使いが挙げられる。団地の住宅のなかには色彩の構成としてコントラストを持つ住宅も多く、似通っている面はあるが、最大の特徴である赤瓦は多く使用されているとは言い難い。また団地内には赤瓦と白壁の住宅はⅠ期からⅣ期へ移るとともにまったく見られなくなった。また、今回の調査対象とした団地のなかには既存の赤瓦と白壁の住宅が建つ地域と隣接しているものもあった。壁の色で「白」が多い住宅は比較的なじんでいるように見えるが、雰囲気として互いに異質であるという印象が残る。これはやはり建築様式の変化によるところが大きい。しかしそうはいっても、企業や住民に、住宅によって景観を創出していくという意識があるということを感じられたのも事実である。住宅団地のなかでは、建築様式や色遣いもシンプルになり

¹⁰ 塀の定義を満たしていないが、塀と同様の要素から成り景観上無視できないもの。

統一感が増す一方で、それは既存の景観との調和とはまた別の、違った方向へと進んでいるように見える。ここに「文化景観は大事だと思うが、自ら強くは望まない」といったような市民の意識があらわれているといえるのではなかろうか。

筆者がドイツのフライブルク市において調査した住宅景観を振り返ってみて、ドイツをはじめとしてヨーロッパの都市では、住宅景観の街並みがほぼ統一された状態であった。これはヨーロッパの人々が街並みに対して、統一感を持たせることを当然のように考えていることの反映であると思われる。また本研究で注目した、住宅景観の色彩については特にドイツと日本の意識の違いが読み取れる。つまり、ドイツでは街並みの調和性や統一性を配慮して、自身の住宅の建築様式を重視するのに対して、日本では自分自身の住居の建築様式や住居が面する街並みに対して調和や統一性を意識することは極めて少ないといえる。東広島市のような赤瓦を文化的特徴とした伝統的和風住宅の風景は、かつての農村的風景が卓越した時代においては意識されていたために、全体として統一感のある景観が保全され、継承されていた。しかし、今日の住宅開発地では、地域の景観に対する配慮はほとんどなく、伝統的な景観が崩壊している。

最後に今後の研究の課題は次の通りである。住宅の景観を外観からの特徴によって表面的に分析するだけでは、やはり限界がある。住宅景観を生み出す住宅所有者や住宅の発注者、あるいは住宅供給業者や住宅設計者がどのような「思い」をもって住宅景観を作り出しているのかを読み取る必要がある。今後は住宅供給時における景観創造者の意識まで踏み込んだ調査を行い、インタビューなどの手法で住宅の概観が誰のどのような意向によって決められていくのかということをも明らかにする必要がある。また、そこに景観行政がどのように絡んでくるかも考えなくてはならない。今後、さらに研究を深めていきたい。

謝辞

本稿の作成にあたり、広島大学大学院教育学研究科の由井義通教授には数々のご助言を賜り、また東広島市 都市部 開発指導課の方々には多くのご協力をいただきましたことに深い感謝の意をこめてここに記します。

参考文献等

- ・岡橋秀典「東広島市における市民の景観意識と景観づくりへの課題」広島大学総合博物館研究報告, 2010
- ・由井義通「郊外ニュータウンにおける住民のまちづくり運動」立命館地理学 第15号, 2003

- ・三浦春菜、宝田智一、杉本俊多「東広島市の赤瓦・白壁景観に関する研究—その2 景観意識に関するアンケート調査—」日本建築学会中国支部研究報告集 第23巻, 2000
- ・ヒューマンアカデミー『色彩検定3級 問題集 改訂版』株式会社アスキー, 2006
- ・ヒューマンアカデミー『色彩検定2級 問題集 改訂版』株式会社アスキー, 2008
- ・ヒューマンアカデミー『色彩検定1級 問題集 改訂版』株式会社アスキー, 2008
- ・東広島市ホームページ
<http://www.city.higashihiroshima.hiroshima.jp/>
- ・東広島市「第2次 東広島市都市計画マスタープラン」
- ・さいたま市「景観色彩ガイドプラン」
- ・石州瓦流自然発生の提案 屋根の学校
<http://www.sekisyu-kawara.jp/howto/machinami/index.html>

図1 東広島市の各地区



表2

平成24年 地区別人口			
西条	69,979	福富	2,656
八本松	28,242	豊栄	3,755
志和	7,355	河内	6,346
高屋	31,187	安芸津	10,891
黒瀬	23,436	総計	183,847

※2012(平成24)年10月末、住民基本台帳より作成。

表3

各地区の人口に占める基幹的農業従事者の割合				
	1990(平成2)	1995(平成7)	2000(平成12)	2005(平成17)
(旧東広島市)				
西条				
八本松	2.0%	2.2%	1.0%	1.3%
志和				
高屋				
黒瀬	4.0%	2.3%	2.3%	1.7%
福富	12.8%	13.4%	11.8%	10.2%
豊栄	10.6%	11.3%	11.2%	9.2%
河内	7.5%	10.1%	7.1%	5.7%
安芸津	7.6%	7.6%	5.3%	3.8%

※農林業センサス、人口移動統計調査、国勢調査の数値を使用し作成。

※基幹的農業従事者とは16歳以上の世帯員で自家農業に主に従事した人。

表4 人口増加率の比較

	広島市	東広島市
1985年	16.94	8.51
1990年	3.99	8.33
1995年	2.14	16.25
2000年	1.52	6.17
2005年	1.79	5.18
2010年	1.69	3.09

※単位(%)、国勢調査より作成。

表5

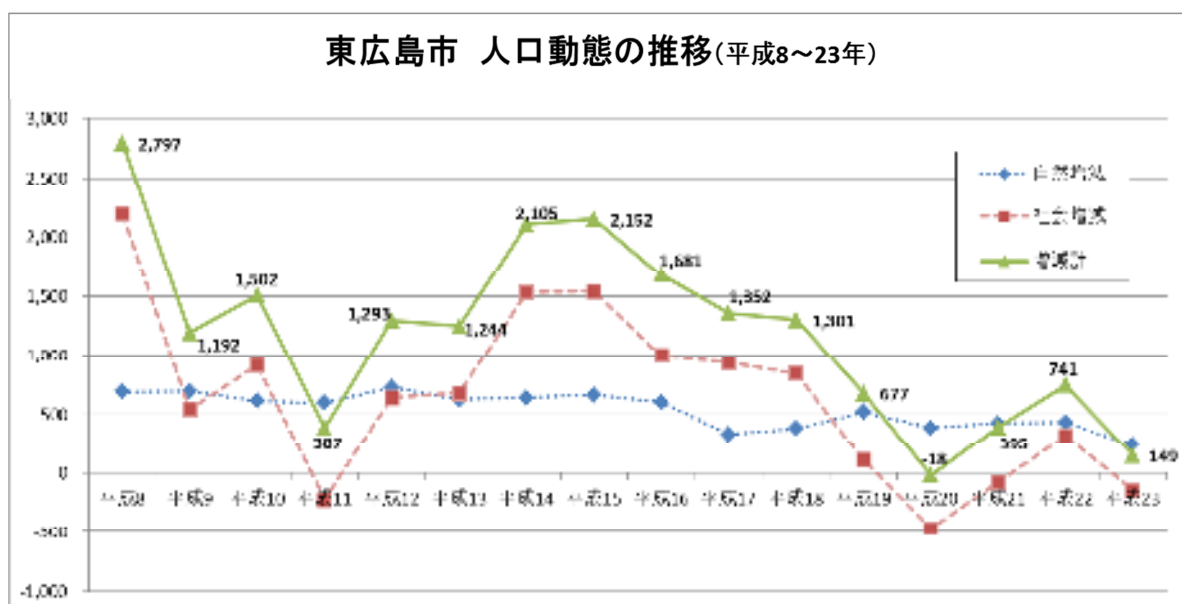


表 6

地区別の自然増減										
	西条	八本松	志和	高屋	黒瀬	福富	豊栄	河内	安芸津	総数
2004(平成16)	541	131	-44	17	-4	-5	-8	-18	-10	600
2005(平成17)	497	96	-44	9	-13	-13	-46	-91	-62	333
2006(平成18)	601	167	-42	10	-100	-35	-51	-83	-87	380
2007(平成19)	662	199	-50	10	-21	-25	-48	-88	-118	521
2008(平成20)	609	153	-68	-13	-44	-43	-57	-70	-80	387
2009(平成21)	691	133	-73	-15	-54	-20	-60	-69	-110	423
2010(平成22)	617	91	-79	17	-35	-40	-60	-56	-111	433
2011(平成23)	584	128	-76	-21	-56	-26	-80	-93	-136	224

※住民基本台帳より作成。

表 7

地区別の社会増減										
	西条	八本松	志和	高屋	黒瀬	福富	豊栄	河内	安芸津	総数
2003(平成15)	1,319	106	36	75	-	-	-	-	-	1,536
2004(平成16)	1,169	5	-31	-40	-67	-5	6	-3	-39	995
2005(平成17)	901	194	-39	-112	6	-9	-11	27	-27	930
2006(平成18)	896	356	-13	-245	-91	30	-39	26	-78	842
2007(平成19)	335	118	-19	-218	-66	-20	-7	20	-32	111
2008(平成20)	171	-143	-46	-259	-113	-7	-27	-5	-39	-468
2009(平成21)	133	70	-27	-119	-108	7	6	24	-61	-75
2010(平成22)	395	97	-12	-63	-65	13	-17	6	-42	312
2011(平成23)	162	-105	2	-100	-49	2	-1	18	-75	-146

※住民基本台帳より作成。

※-はデータなし

表 8

平成23年 地区別の増減数										
	西条	八本松	志和	高屋	黒瀬	福富	豊栄	河内	安芸津	
出生数	964	378	33	209	163	20	10	17	49	
死亡数	380	219	109	230	219	46	90	110	185	
転入数	3,868	924	138	799	712	30	48	100	185	
転出数	3,706	1,029	136	899	761	28	49	82	260	

※住民基本台帳より作成。

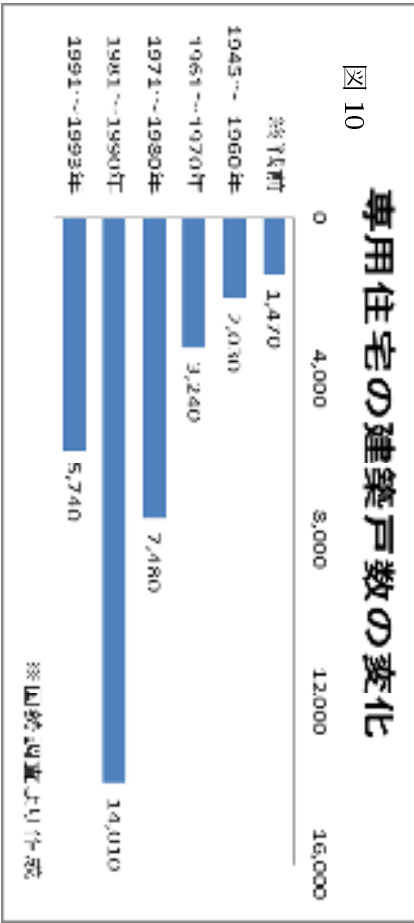
表 9

開発面積・年代と開発地域													
	0.7～1ha未満			1ha～2ha未満		2ha～3ha未満		3ha～4ha未満		4ha以上		計	
	西条	八本松	高屋	西条	八本松	高屋	西条	八本松	高屋	西条	八本松		高屋
1975～1980年（昭50～55）	2	1		1			1	1	3	2	1	12	
1981～1990年（56～平2）		2	1			3					1	2	10
1991～2000年（3～12）	3	2			1				1	2		1	10
2001～2010年（13～22）	5	2	2				1	2				2	15
2011年～（23～）	2	2	2										6
計	12	8	6	1	1	3	2	1	2	4	2	5	53
	26			5		5		6		11			

※2012年12月20日現在、開発登録簿より作成

図 10

専用住宅の建築戸数の変化



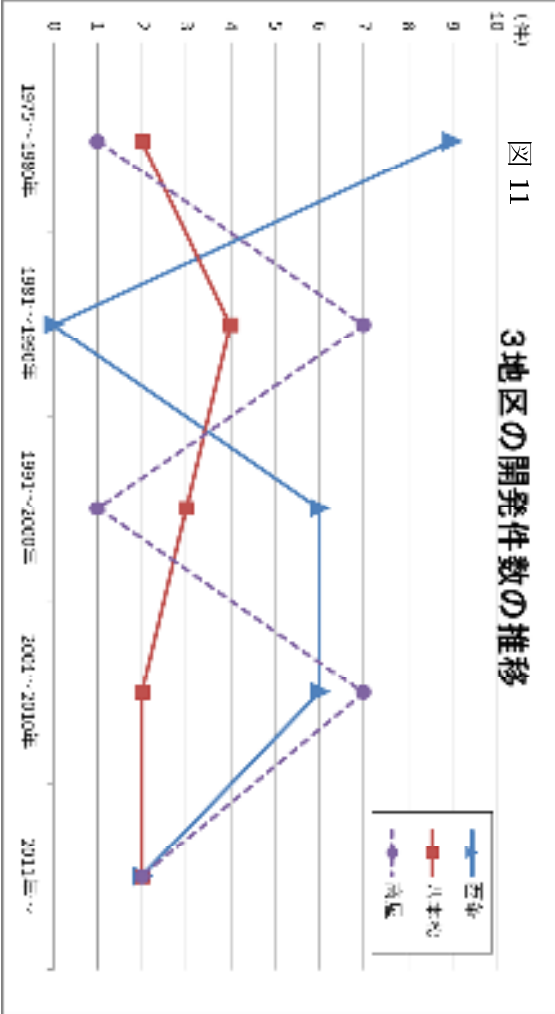


表 12

対象団地情報一覧						
開発時期	団地番号	地区	開発登録許可年	面積(ha)	戸数	撮影日時
I 期	1	八本松	1977(昭52)	8.595	32	2013年1月13日 午前10時~
	2	西条	1976(昭51)	59.232	208	2012年12月29日 午後2時~ 2012年12月30日 午後3時~
	3	八本松	1989(平1)	7.867	33	2013年1月20日 午後4時~
II 期	4	八本松	1981(昭56)	93.818	202	2013年1月20日 午後2時~
	5	西条	1997(平9)	9.221	18	2013年1月19日 午後3時~
	6	高屋	1992(平4)	248.093	437	2013年1月12日 午後3時~ 2013年1月13日 午後2時~ 2013年1月16日 午後3時~
III 期	7	西条	2008(平20)	7.924	38	2013年1月17日 午後4時~
	8	高屋	2008(平20)	50.158	172	2013年1月17日 午前11時~

表 13

屋根の色と全体における高彩度または高明度の数と割合									
	屋根色数 (%)	高彩度軒数 (%)	高明度軒数 (%)			屋根色数 (%)	高彩度軒数 (%)	高明度軒数 (%)	
団地番号 1	灰	15	47		団地番号 2	灰	68	33	
	黒	4	13			黒	86	41	
	R	6	19			R	25	12	
	YR	3	9			YR	10	5	
	G	1	3			G	3	1	
	BG	0	0		団地番号 3	BG	2	1	
	B	0	0			B	12	6	
	他	3	9			他	3	1	
	灰	18	55			灰	74	37	
	黒	10	30			黒	67	33	
団地番号 3	R	2	6		団地番号 4	R	16	8	
	YR	2	6			YR	23	11	
	G	0	0			G	7	4	
	BG	0	0			BG	0	0	
	B	1	3			B	10	5	
	他	0	0		団地番号 5	他	4	2	
	灰	9	50			灰	42	10	
	黒	6	33			黒	302	69	
	R	0	0			R	17	4	
	YR	2	11			YR	57	13	
団地番号 5	G	1	6		団地番号 6	G	16	4	
	BG	0	0			BG	0	0	
	B	0	0			B	2	0	
	他	0	0			他	0	0	
	灰	3	8		団地番号 7	灰	4	2	
	黒	21	54			黒	159	93	
	R	3	8			R	4	2	
	YR	10	25			YR	4	2	
	G	2	5			G	0	0	
団地番号 7	BG	0	0		団地番号 8	BG	0	0	
	B	0	0			B	0	0	
	他	0	0			他	1	1	
	灰	3	8			灰	4	2	
	黒	21	54			黒	159	93	
	R	3	8		団地番号 8	R	4	2	
	YR	10	25			YR	4	2	
	G	2	5			G	0	0	
	BG	0	0			BG	0	0	
	B	0	0			B	0	0	
	他	0	0		団地番号 8	他	1	1	
	灰	3	8			灰	4	2	
	黒	21	54			黒	159	93	
	R	3	8			R	4	2	
	YR	10	25			YR	4	2	
団地番号 7	G	2	5		団地番号 8	G	0	0	
	BG	0	0			BG	0	0	
	B	0	0			B	0	0	
	他	0	0			他	1	1	
	灰	3	8			灰	4	2	
	黒	21	54		団地番号 8	黒	159	93	
	R	3	8			R	4	2	
	YR	10	25			YR	4	2	
	G	2	5			G	0	0	
	BG	0	0			BG	0	0	
団地番号 7	B	0	0		団地番号 8	B	0	0	
	他	0	0			他	1	1	
	灰	3	8			灰	4	2	
	黒	21	54			黒	159	93	
	R	3	8			R	4	2	
団地番号 7	YR	10	25		団地番号 8	YR	4	2	
	G	2	5			G	0	0	
	BG	0	0			BG	0	0	
	B	0	0			B	0	0	
	他	0	0			他	1	1	

表 14

壁の色と全体における高彩度または低明度の数と割合									
	壁色数	(%)	高彩度軒数	(%)	低明度軒数	(%)		壁色数	(%)
団地番号1	灰	1	3		0	0	団地番号2	灰	18
	黒	0	0		0	0		黒	2
	白	9	28		0	0		白	79
	R	5	16		0	0		R	23
	YR	12	38		0	0		YR	35
	Y	3	9		0	0		Y	42
	BG	1	3		0	0		G	0
	B	1	3		0	0		B	9
									4
									0
団地番号3	灰	2	6		0	0	団地番号4	灰	22
	黒	0	0		0	0		黒	0
	白	14	43		0	0		白	61
	R	4	12		0	0		R	26
	YR	8	24		0	0		YR	43
	Y	5	15		0	0		Y	36
	G	0	0		0	0		G	1
	B	0	0		0	0		B	11
									6
									2
団地番号5	灰	3	16		0	0	団地番号6	灰	77
	黒	0	0		0	0		黒	15
	白	5	28		0	0		白	44
	R	5	28		0	0		R	52
	YR	2	11		0	0		YR	148
	Y	3	17		0	0		Y	56
	G	0	0		0	0		G	12
	B	0	0		0	0		B	30
									7
									5
	灰	4	10		3	8	団地番号8	灰	28
	黒	2	5		2	5		黒	11
	白	10	26		0	0		白	8
	R	0	0		0	0		R	39
	YR	17	44		0	0		YR	79
団地番号7	Y	5	13		0	0		Y	7
	G	1	2		0	0		G	0
	B	0	0		0	0		B	0
									0
									0

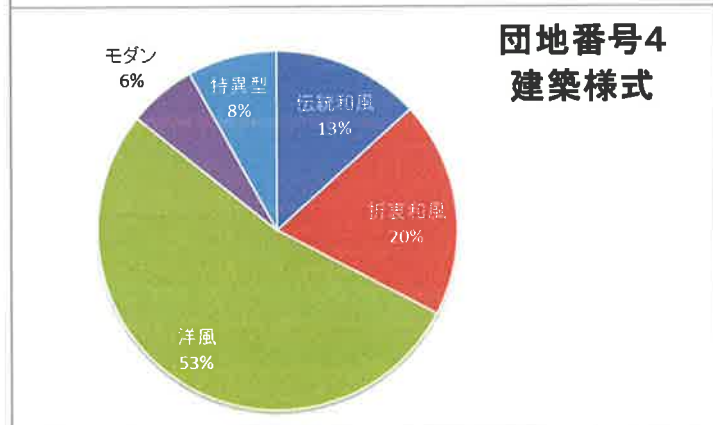
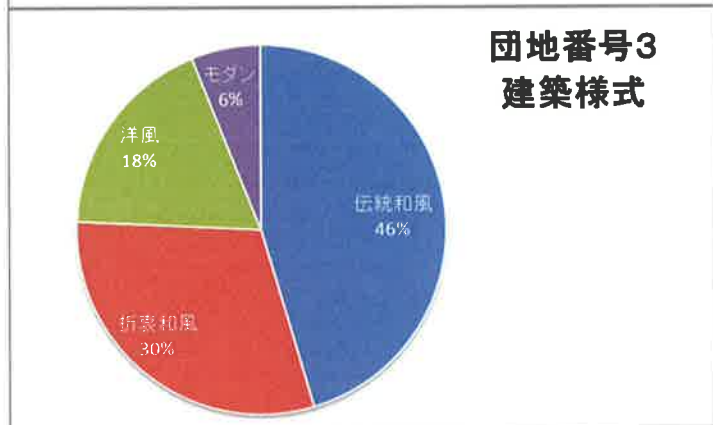
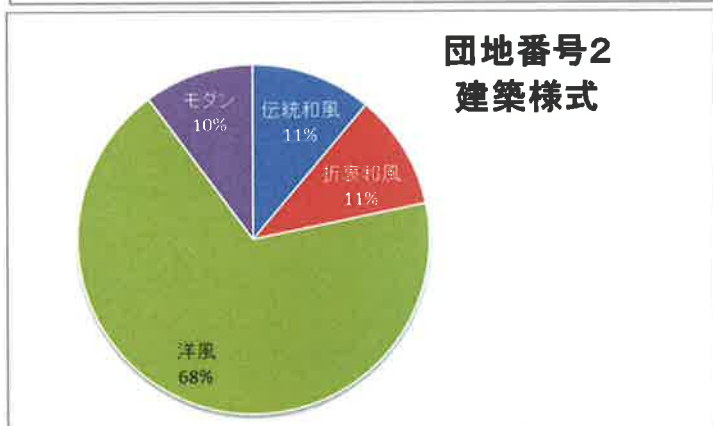
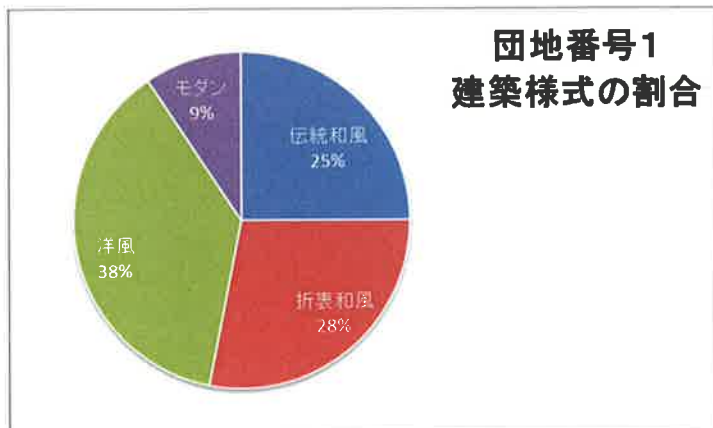
表 15

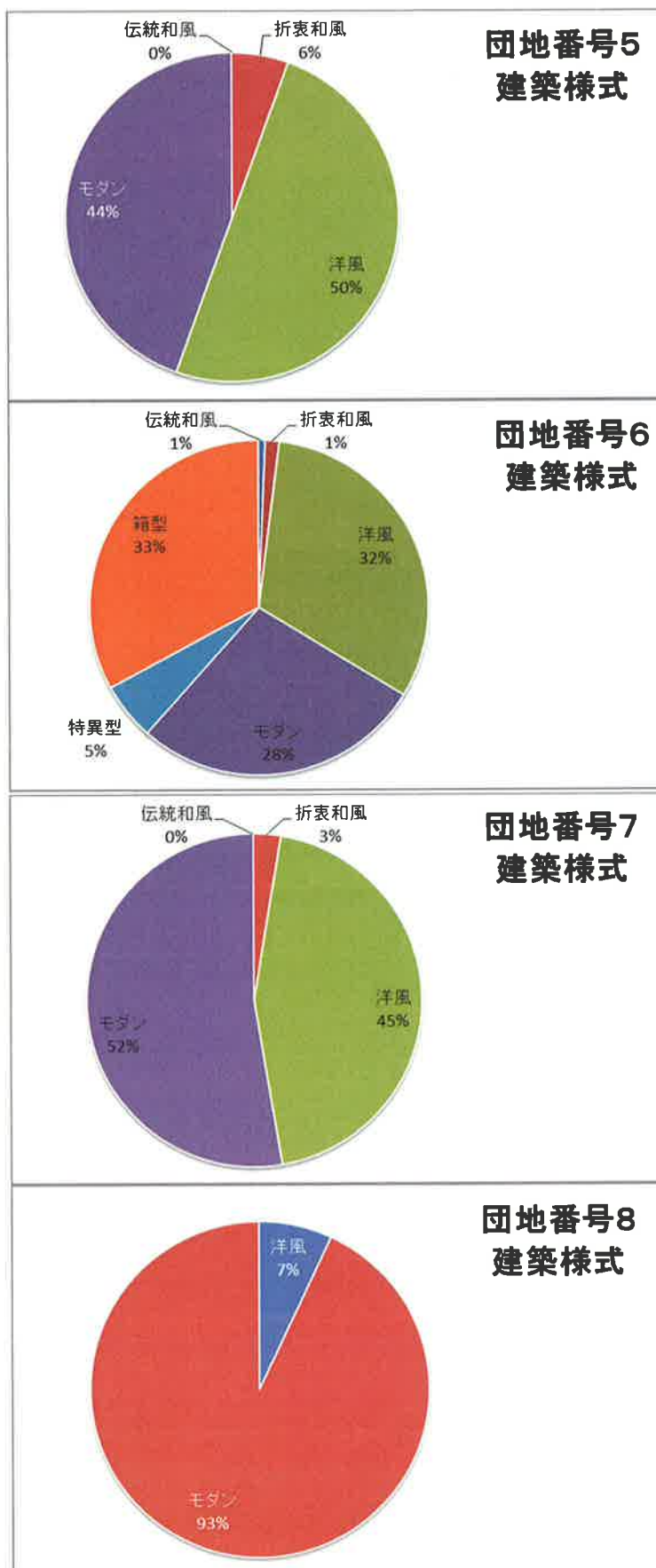
壁における色彩構成と強調色の有無													
				戸数（％）	強調色あり					戸数（％）	強調色あり		
団地番号 1	単色			19	60	3	団地番号 2	単色			155	70	20
	レンガ調			1	3	0		レンガ調			7	3	1
	2色	同素材	0	0	0	2色		同素材	6	3	0		
		同素材・強	0	0	0			同素材・強	10	5	2		
		異素材	2	6	1			異素材	8	4	2		
		異素材・強	3	9	1			異素材・強	10	4	4		
		（レンガを含む）	0	0	0			（レンガを含む）	6	3	1		
		（レンガを含む）・強	7	22	0			（レンガを含む）・強	6	3	1		
	3色	3色	0	0	0	3色		3色	0	0	0		
		3色・強	0	0	0			3色・強	0	0	0		
		3色（レンガを含む）	0	0	0			3色（レンガを含む）	0	0	0		
		3色・（レンガ含む）強	0	0	0			3色・（レンガ含む）強	0	0	0		
団地番号 3	単色			15	46	0	団地番号 4	単色			156	78	38
	レンガ調			0	0	0		レンガ調			0	0	0
	2色	同素材	0	0	0	2色		同素材	5	3	2		
		同素材・強	0	0	0			同素材・強	2	1	1		
		異素材	11	33	1			異素材	11	5	5		
		異素材・強	1	3	0			異素材・強	7	4	2		
		（レンガを含む）	4	12	0			（レンガを含む）	3	2	0		
		（レンガを含む）・強	2	6	0			（レンガを含む）・強	14	7	1		
	3色	3色	0	0	0	3色		3色	0	0	0		
		3色・強	0	0	0			3色・強	1	1	1		
		3色（レンガを含む）	0	0	0			3色（レンガを含む）	0	0	0		
		3色・（レンガ含む）強	0	0	0			3色・（レンガ含む）強	1	1	0		
団地番号 5	単色			12	67	3	団地番号 6	単色			231	53	95
	レンガ調			1	5	0		レンガ調			4	1	2
	2色	同素材	0	0	0	2色		同素材	6	1	3		
		同素材・強	0	0	0			同素材・強	67	15	19		
		異素材	1	5	1			異素材	20	5	11		
		異素材・強	3	17	1			異素材・強	49	11	18		
		（レンガを含む）	0	0	0			（レンガを含む）	6	1	2		
		（レンガを含む）・強	1	6	0			（レンガを含む）・強	16	4	7		
	3色	3色	0	0	0	3色		3色	4	1	2		
		3色・強	0	0	0			3色・強	30	7	5		
		3色（レンガを含む）	0	0	0			3色（レンガを含む）	0	0	0		
		3色・（レンガ含む）強	0	0	0			3色・（レンガ含む）強	3	1	0		
団地番号 7	単色			19	49	10	団地番号 8	単色			87	51	12
	レンガ調			2	5	0		レンガ調			0	0	0
	2色	同素材	0	0	0	2色		同素材	23	13	3		
		同素材・強	6	15	0			同素材・強	35	20	2		
		異素材	1	2	1			異素材	8	5	1		
		異素材・強	7	18	3			異素材・強	16	9	0		
		（レンガを含む）	1	3	0			（レンガを含む）	1	1	0		
		（レンガを含む）・強	3	8	1			（レンガを含む）・強	2	1	2		
	3色	3色	0	0	0	3色		3色	0	0	0		
		3色・強	0	0	0			3色・強	0	0	0		
		3色（レンガを含む）	0	0	0			3色（レンガを含む）	0	0	0		
		3色・（レンガ含む）強	0	0	0			3色・（レンガ含む）強	0	0	0		

表 16 団地番号6 建築様式と壁色

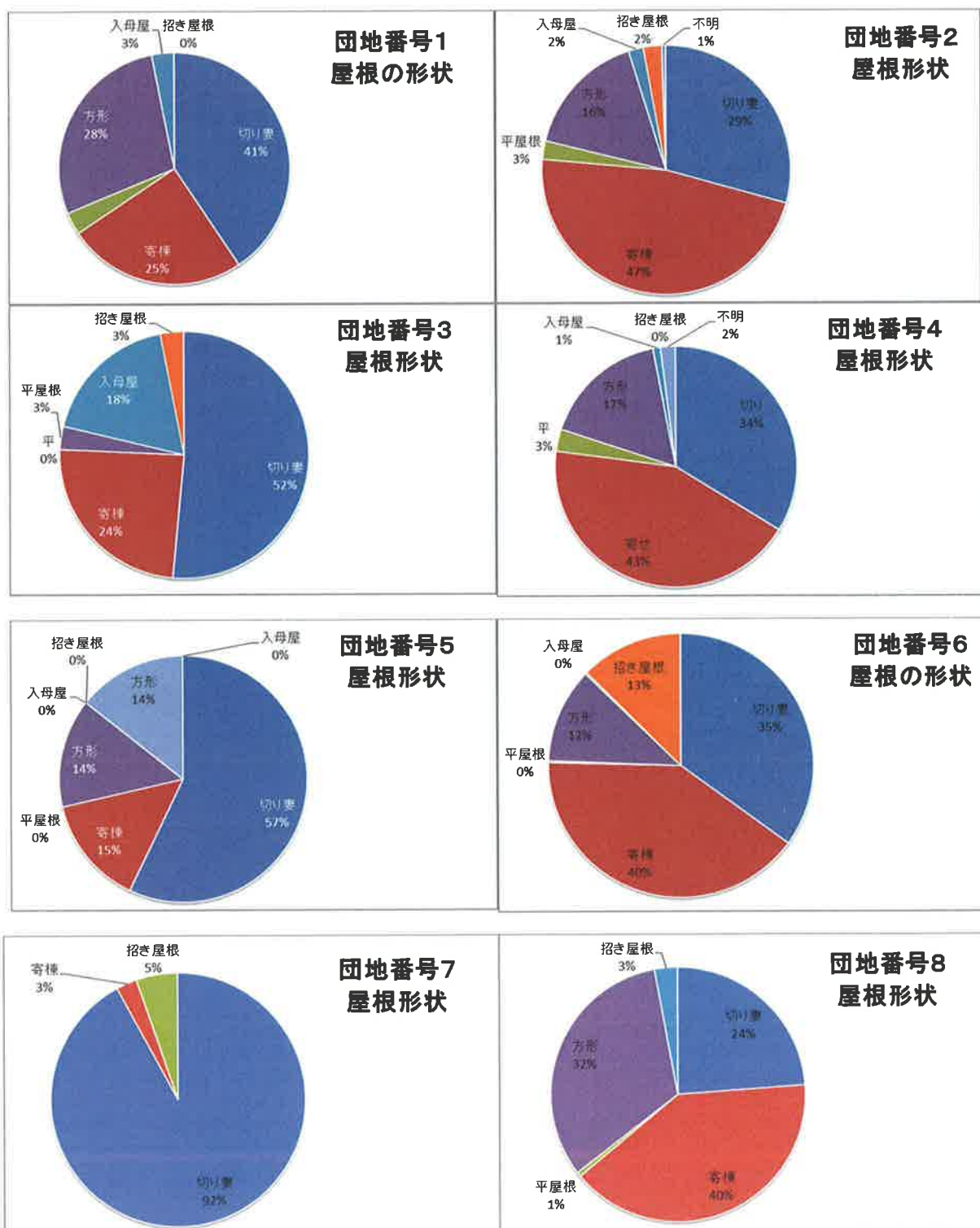
	モダン	モダン・特異	総計
B	2	1	32
G	1		12
R	8	1	52
Y	10		56
YR	46	1	148
灰	14	1	77
黒	14	1	15
白	24	2	44
総計	119	7	436

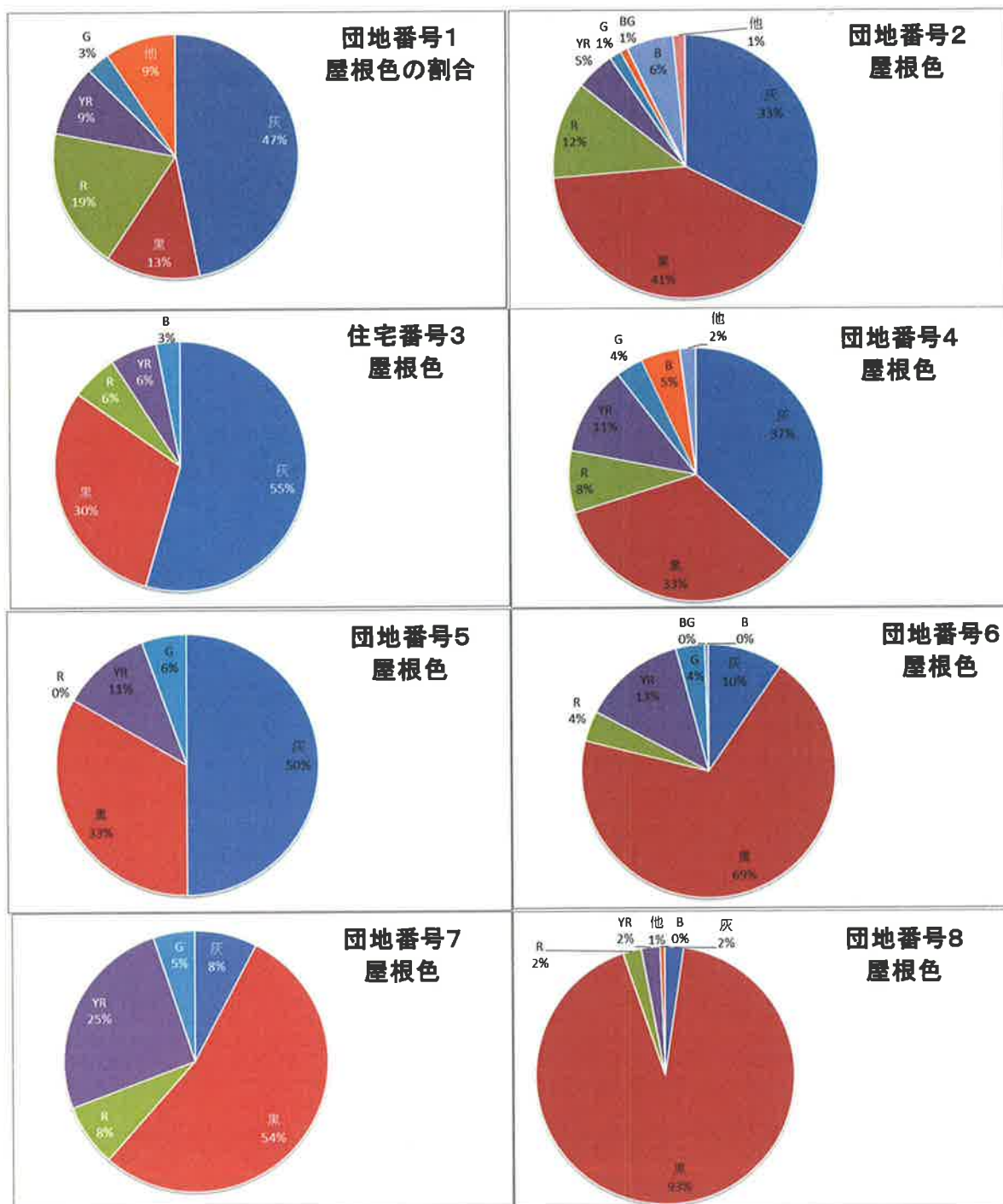
1. 建築様式



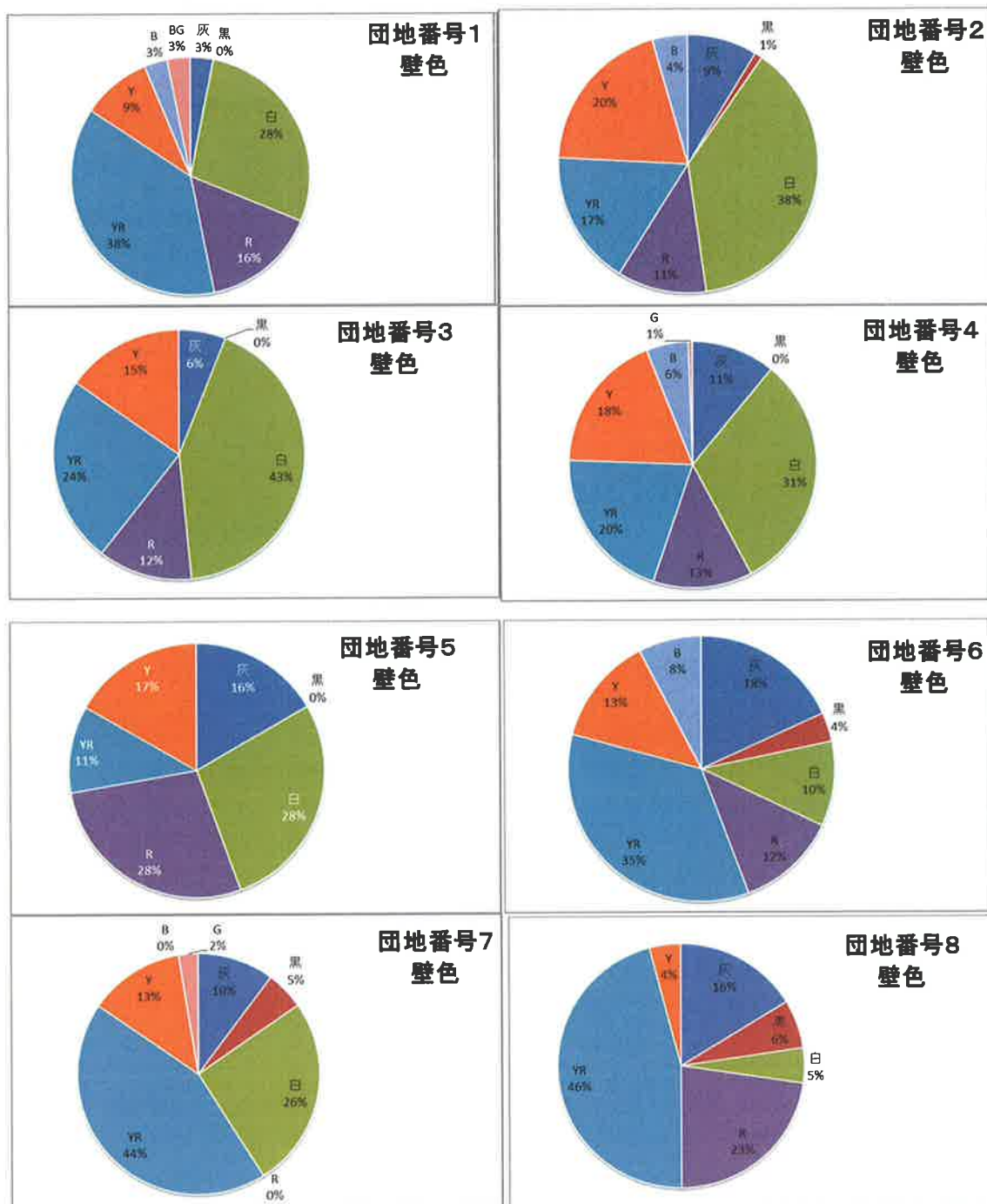


2. 屋根の形状と色彩

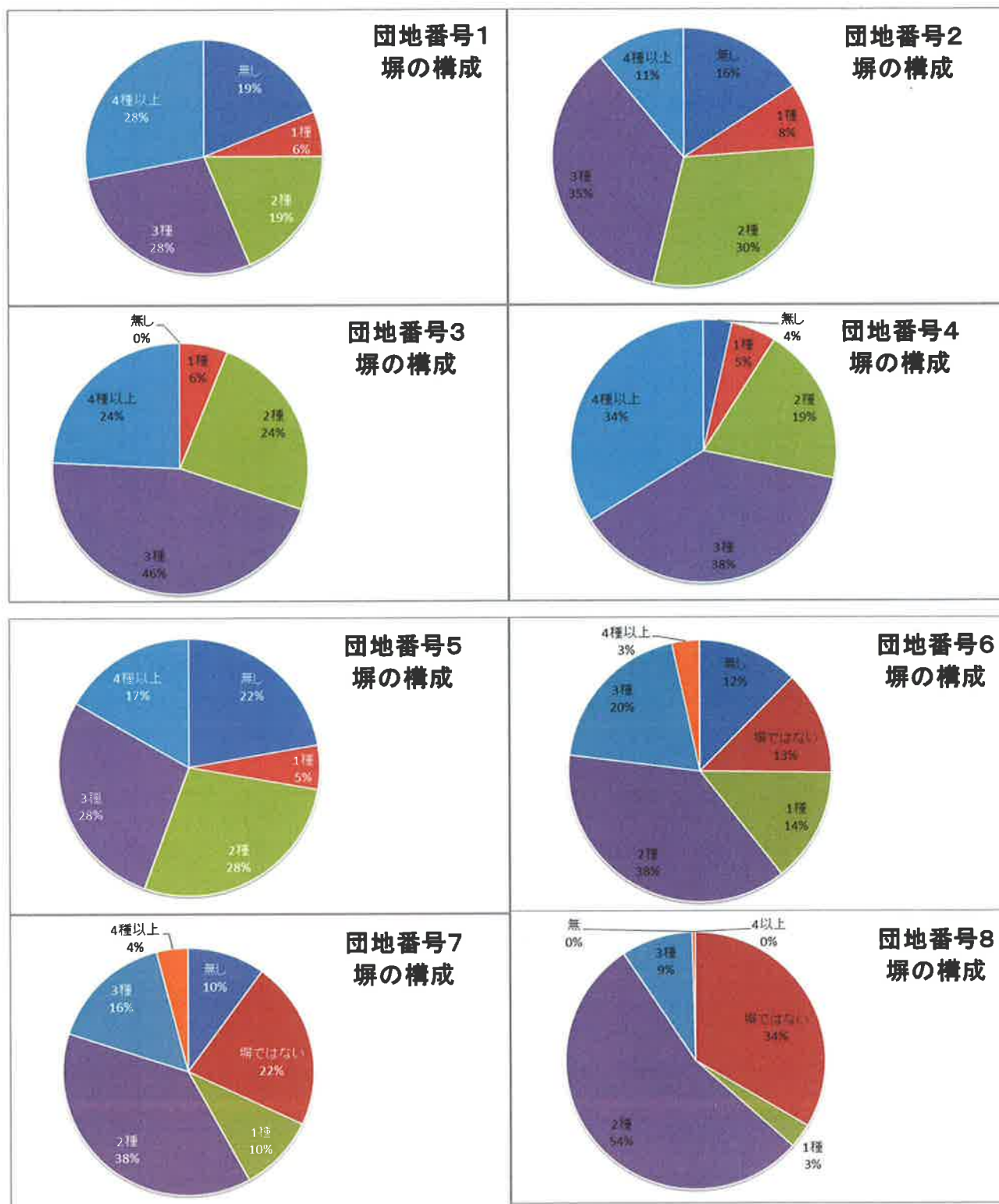


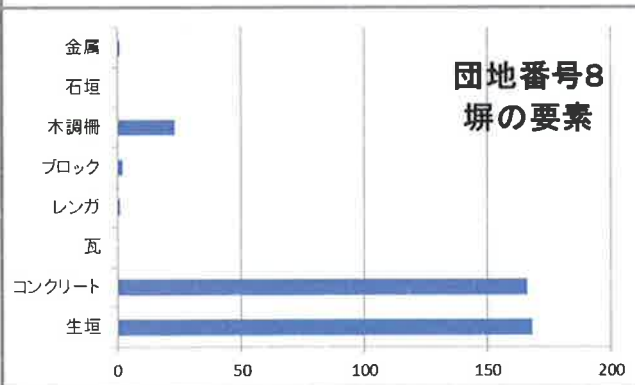
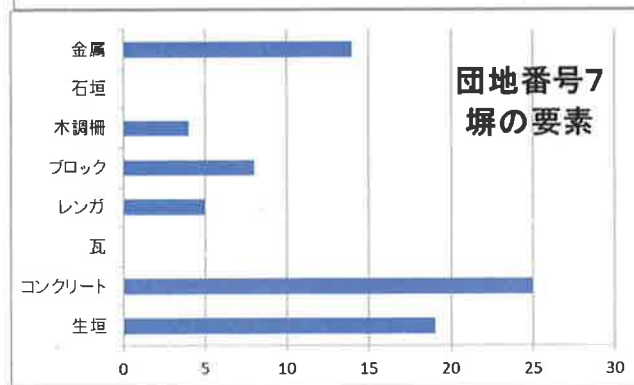
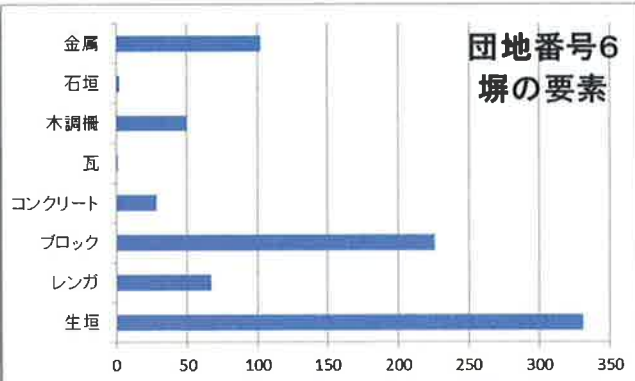
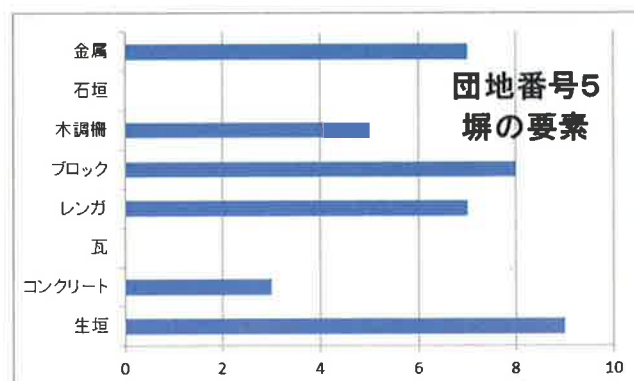
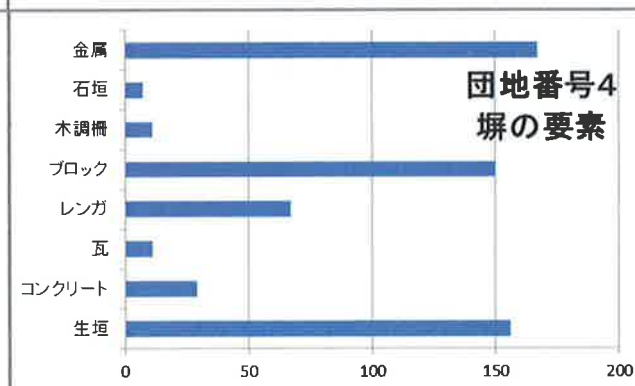
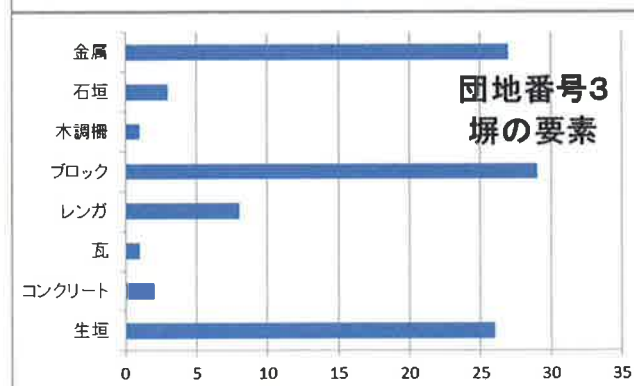
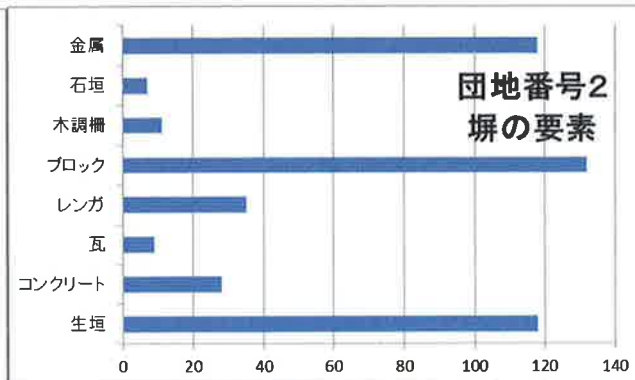
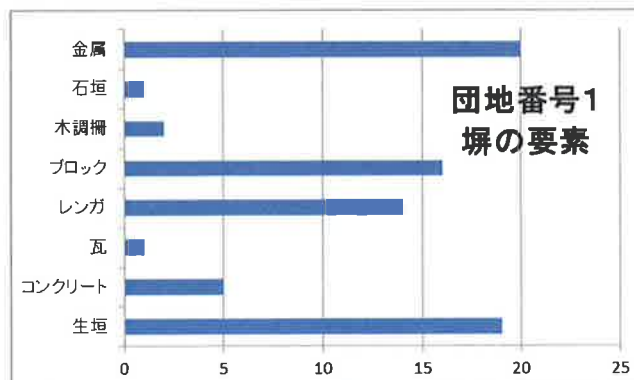


3. 壁の色



4. 塀の構成





文末資料 <写真>



団地のなかの赤瓦と白壁の住宅



「伝統和風」の例



「折衷和風」の例



「洋風」の例



「モダン」の例



「箱型」の例





「特異型」の例



団地番号4近辺の景観
(東広島市の文化景観の1例として)



「強調色」(ドア)の1例



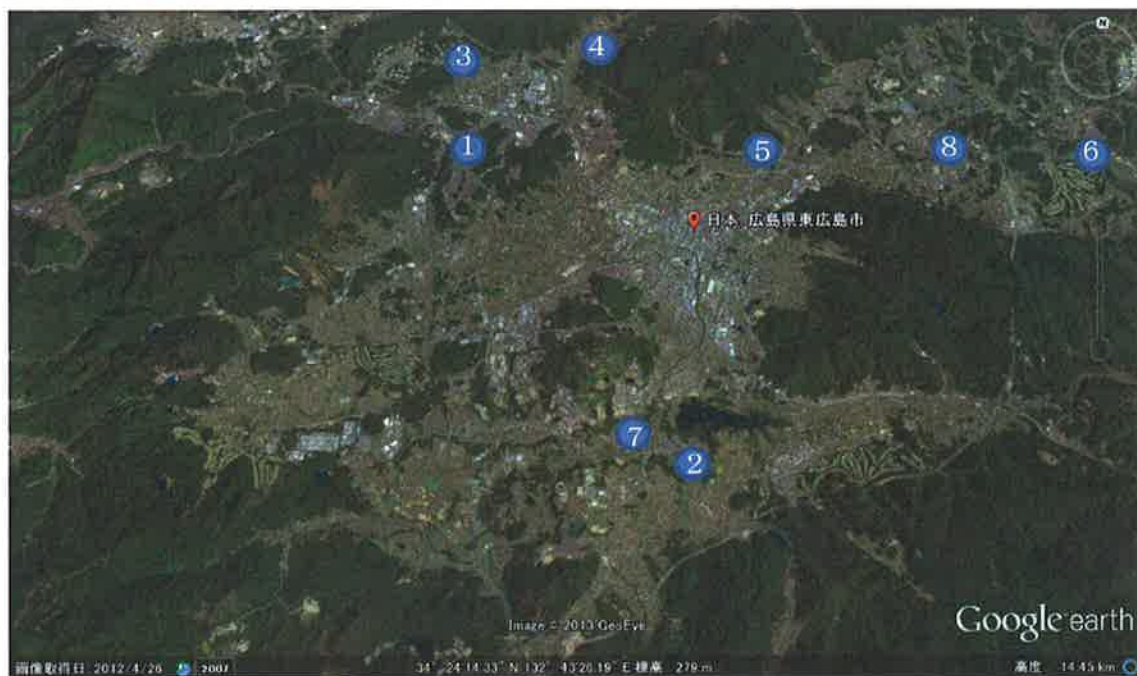
「強調色」(ライン) の1例



塀の統一された通り
(団地番号8より)

文末資料 <研究対象地域>

東広島市（西条地区、八本松地区、高屋地区） 図中の番号は調査対象地域



団地番号 1



団地番号 2



団地番号 3



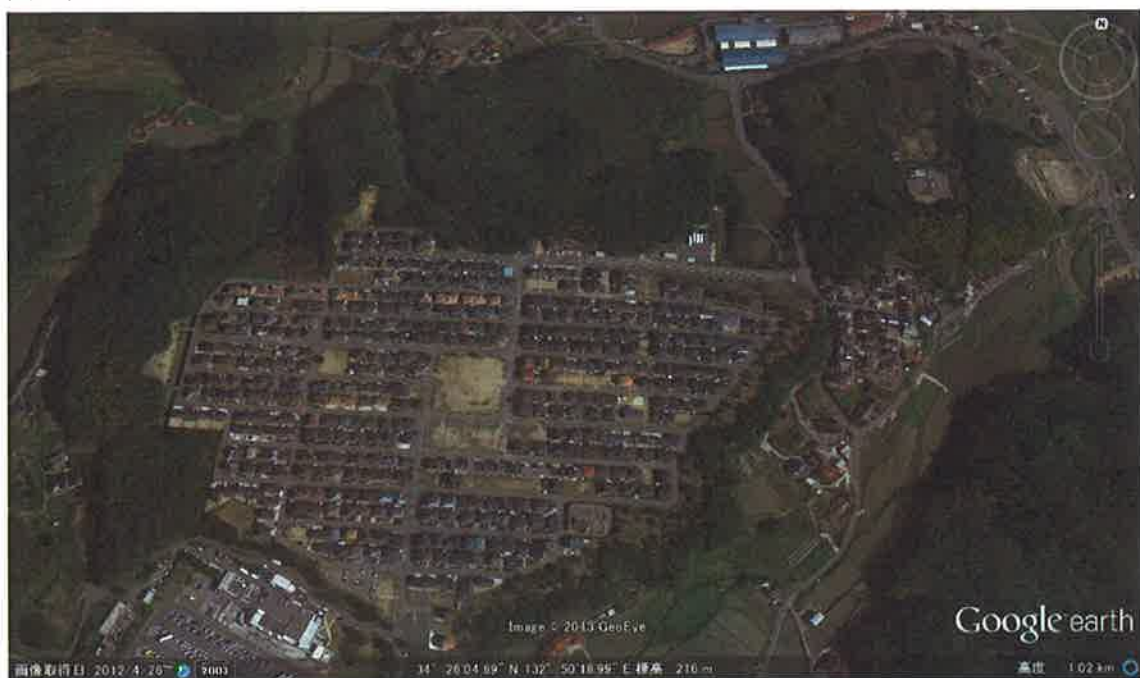
団地番号 4



団地番号 5



団地番号 6



団地番号 7



団地番号 8

